

ふるさと再発見 第34回

Re:discovery Omihachiman

近江八幡偉人伝 ⑦

「明治の三筆の一人」

巖谷一六

『近江八幡の歴史』第9巻

「地域文化財」から、近江八幡の偉人を紹介します。今回は、「明治の三筆」であり、近江水口出身の巖谷一六（1834年〜1905年）を取り上げます。

巖谷一六は、名は修、字は誠卿まことけいといい、金粟きんぐ 歙霞仙史せつかせんしなどと号しました。明治政府に出仕し、太政官の役人として勤務しました。一六の号については、当時の官庁が一と六の日が休日きゅうじつで、休みの日に書画をたしなむ

ことができないことにより、同じく金粟とは動続から、歙霞仙史は休暇と掛けたものです。一六の太政官正院時代の同僚には、洗沢栄一せんざわさかがいました。父・市郎右衛門いちろうゑもんが亡くなった翌年に栄一は、一六に対し墓碑の字を催促しています（『日記』十一月二日条）。その墓碑は、一六が額字を書いています。

一六の書は、八幡に多く所蔵されています。特に、明治15年（1882年）秋頃は、一六が

八幡に滞在しており、多くの作品を遺しました。その中の一つ、八幡商人の森五郎兵衛宛に送った作品があります。

内容は、「金を積み子孫を遺すは、子孫未だ必ずしも守らず。書を積み子孫に遺すは、子孫未だ必ずしも読まず。陰徳を冥々めいめいの中に積むにしかず。おもへらく、子孫長久の計はかりごと、此れ先賢の格言、乃ち後人の龜鑑きかんなり」とあります。善い行いは、人に知られないところで、たとえ子孫であっても見返りを求めず行うこと、それが子孫繁栄の秘訣である、というものです。

また、同じ年に書かれたと思われる、平木家に贈られた扁額へんがくには、「積善には余慶有り」と書かれています。善い行いは、子孫にまで影響を与えるものであるという内容で、こちらも商人に対する訓示です。

両作品は、直接執筆の依頼を受けてのもので、一六の書の特長である三角形の起筆や飄々とした書きぶりがよくわかります。特に扁額は、右肩上がりの線の中に、あえて左肩上がりの線を加えることで、全体のバランスをとって、ユニークに仕上げられています。

一六は、書の執筆依頼があれば、できる限り応えていたようで、全国各地に作品や、碑文を残しており、人々に愛された書家でした。八幡に伝わる作品にも、地元の商人たちとのつながりを示唆するものが多くあり、一六もまた故郷に近い八幡の人々に親しみを持って接していたのではないのでしょうか。

ご紹介した作品は、東近江市五個荘にある、観峰館にて、11月21日(日)まで開催中の特別企画展「文人の行き交う街」で展示されます。

巖谷一六をはじめとする、八幡の旧商家に伝わる作品の数々を、この機会にぜひご覧ください。

（公財）日本習字教育財団 観峰館
学芸員 寺前公基



積善有余慶扁額

❗ 新型コロナウイルス関連の情報は、市ホームページをご覧ください

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本紙掲載の催しが急に中止や延期になる場合があります。開催の可否は事前に担当課または主催者へご確認ください。また、最新情報は、市のホームページ <https://www.city.omihachiman.lg.jp/> で随時発信しておりますので、ご確認をお願いします。

人口と世帯

令和3年9月1日現在
()は前月比

総数	82,233人	(- 18)
男	40,418人	(+ 4)
女	41,815人	(- 22)
世帯	34,747世帯	(- 7)

※外国人住民(42か国・地域/1,609人)を含みます。

